

# 共働き家庭における夫の家事・育児遂行に対する 妻の満足度の規定要因について

松信 ひろみ  
(駒澤大学文学部)

## 【要旨】

本稿では、共働き夫婦における夫の家事・育児遂行に対する妻の満足度の規定要因について検討する。夫の家事遂行に対する妻の満足度と育児遂行に対する妻の満足度に関してそれぞれ個別に検討したところ、両者に共通して、夫の家事／育児遂行の程度と夫の情緒的サポートが影響を及ぼしていることが確認された。さらに、育児遂行に対する満足度に関しては、夫の親の家事・育児サポートの程度と妻の通勤時間の影響も確認された。

これまで夫婦満足度に関しては、夫の情緒的サポートがもっとも影響を及ぼしているとされており、また、家事分担に対する不公正感に関する研究では、夫の家事遂行の程度が、最も影響を及ぼすことが確認されている。夫の家事・育児遂行への妻の満足度に関しては、この両者の影響が確認された。と同時に、家事と育児を個別に検討したことによって、それぞれに影響する要因の相違が確認された。夫の育児に対する妻の満足度に関しては、夫の親のサポートの程度と妻の通勤時間の影響がみられた。

**キーワード：**共働き夫婦、夫の家事・育児遂行への満足度、夫の情緒サポート、親の家事・育児サポート、妻の通勤時間

## 1. 研究の目的

本稿の目的は、共働き家庭における夫の家事育児遂行に対する妻の満足度の規定要因について検討することである。

日本における男性の家事・育児遂行度の低さは、長年指摘されているところであり、妻が就業していても、夫の遂行度の低さは、妻が専業主婦の場合と大差がないとされてきた。しかし、2008年に行われた第4回全国家庭動向調査によれば、2006年に実施された同調査と比較して、妻が常勤である共働き家庭においては、夫の家事遂行の程度がやや高くなっていること、子育てに関しては、家事よりも夫の遂行度が高くなっている傾向が指摘されている(国立社会保障・人口問題研究所 2008)。だが、共働き家庭の夫の家事・育児遂行度が高くなっているとはいえ、「週1、2回」の遂行が専業主婦家庭より10%程度高いにとどまり、常勤の妻でも、家事の負担率が80%以上であるのが全体の49%、育児に関しても同じく妻が80%以上負担している割合が51%と、圧倒的に家事・育児は妻が遂行している

という実情にある。

それでは、こうした夫の家事・育児分担率の低さに対して、共働きの妻たちは、どのような認識をもっているのだろうか。性別役割分業を否定する意識の傾向が高まる一方で、こうした夫の家事・育児遂行の低さに対して、妻はさほど不満をもっていないといわれている。そうであるならば、妻が不満をもたないという状況に影響している要因とは何か。

## 2. 夫の家事・育児遂行に対する妻の満足度とその規定要因

### 2.1 先行研究の検討

共働き夫婦における夫の家事・育児遂行の程度と、それに対する妻の満足度を直接的に検討した調査研究はあまりない。例えば、末盛や李の調査研究は、夫の家事遂行の程度と妻の夫婦関係への満足度に関するものである（末盛 1999; 李 2008）。末盛と李の研究対象は、共働き夫婦に限らず、専業主婦家庭も含めたものであり、末盛は、妻の夫婦関係に対する満足度の程度は、夫の家事遂行の程度ではなく、夫の情緒サポートの程度に規定され、さらに、妻が伝統的な性別役割分業意識をもつ妻のほうが、夫の情緒的サポートが夫婦関係満足度に対して有効に作用しているとしている（末盛 1999）。また、李は、夫の家事遂行に対する妻の役割期待という変数を導入し、その効果を検証している（李 2008）。妻の夫に対する家事遂行の期待充足度が高いほど、妻の夫婦関係満足度が高いというのである。夫の家事遂行の絶対量が妻の満足度に無関係というわけではないが、絶対量が低くとも妻の期待度が低ければ、満足度は高いとしている。さらに、妻の就業形態別に満足度を検討しているが、就業形態の違いによる満足度の差はみられないとしている。

また、上述の夫の家事・育児遂行と妻の満足度に関する調査研究においては、①夫の家事遂行の程度は、夫の家事遂行と育児遂行を合わせた指標が用いられている、②従属変数としての夫婦関係満足度は、夫の家事・育児遂行そのものに対する満足度ではなく、夫婦関係全般についての満足度を指標として用いている、という共通点がある。つまり、これらの研究の焦点は、夫の家事・育児遂行が、どの程度夫婦関係の満足度に寄与しているのかということにある。

一方、夫の家事遂行そのものについての妻の満足度という観点から言えば、岩間による夫婦間の家事分担に対する妻の不公平感についての研究がより近い研究であろう。岩間は、「公平価値理論」、「勢力論」、「均衡理論」のどの理論が、妻の家事に関する不公平感についてもっとも説明力をもつかを検討している（岩間 1997）。岩間は、家事遂行の程度に育児は含めずに延期可能／延期不可能な家事と家事を二分して検討している。その結果、客観的な事実として夫が家事に参加しているほど妻の不公平感が低くなることを確認している。

そこで、本稿では、上述の先行研究を踏まえ、子どものいる共働き夫婦を対象として、家事と育児を区分した上で、夫の家事遂行、育児遂行に対する妻の満足度の決定要因を検

討してみたい。そもそも家事と育児は質的に異なる側面を有している。特に、育児に関しては、「3歳児神話」などに代表されるように、子どもが小さいうちの育児は母親の役割であるという性別役割分業意識から、夫に期待されない可能性もある。つまり、前述の李の指摘する役割期待という面から見れば、そうした「母親役割意識」が妻に強いならば、子育てに関しては、夫の遂行の程度が低くても、妻の満足度は高いということも起こり得るだろう。また、牧野による子育て不安に関する研究の知見からいえば、夫は実質的な育児にかかわらなくとも、夫の情緒的サポートがあれば、妻の満足度は高まるかもしれない(牧野 1982, 1983)。また、家事に関しては、岩間の知見からすれば、妻の満足度には、夫の実質的な家事へのかかわりがもっとも影響を及ぼしているのではないかと考えられる(岩間 1997)。つまり、夫の家事遂行度と育児遂行度に対する妻の満足度を規定する要因は、それぞれ異なる可能性が考えられるのである。

また、前述のように、これまでの先行研究では、妻の満足度を規定する重要な変数として、「夫の情緒サポート」「夫の家事遂行に対する妻の期待度」「妻の性別役割分業意識」「夫の実質的な家事遂行の程度」が指摘されている(末盛 1999; 李 2008; 岩間 1997)。本研究では、これらの変数に加えて親族の家事・育児サポートと通勤時間という変数を導入したい。

日本における共働き夫婦では、家事・育児に関して、特に妻方の親を中心とした親族のサポートが多く見受けられる(国立社会保障・人口問題研究所 2008)。こうした親によるサポートは、親との同居、もしくは近居の場合に活用される場合が多く見受けられるが、特に子どもが熱を出したような場合に関しては、妻の親を中心に、飛行機や新幹線などを利用しなければいけないような遠方に居住している親でも、サポート資源として活用されることがある(松信 2010, 2011)。こうした親のサポートは、妻にとって夫がかかわれないときの代替要員として利用されているともいえる(松信 2010, 2011)。そこで、親のサポートが得られるか否かは夫の育児遂行に対する妻の満足度にかかわっているのではないだろうか。すなわち、親のサポートを多く得ている妻ほど、夫から協力が得られないという認識から、夫の家事・育児遂行に対する満足度が低くなる可能性が考えられる。

また、通勤時間に関しては、そもそも家事・育児と仕事の両立を優先的に考える妻の場合、通勤時間の短い勤務先(職住近接)を選択する傾向があるという指摘がある(松信 2002)。つまり、通勤時間の短い妻の場合、そもそも自らが家事・育児を遂行することを前提としているため、夫には家事・育児遂行を期待しておらず、したがって、夫の家事・育児遂行の程度が低くとも、満足度が高いということが考えられる。

## 2.2 仮説設定

そこで、本研究では、以下の仮説を設定して検証を行う。

(仮説1) 夫の家事・育児遂行の程度が高いほど、夫の家事・育児遂行に対する妻の満足度は高くなる

(仮説2) 夫の情緒サポートの程度が高いほど、夫の家事・育児遂行に対する妻の満足度は高くなる

(仮説3) 家事・育児に対する親のサポートを得ているほど、夫の家事・育児遂行に対する妻の満足度は低くなる

(仮説4) 妻の通勤時間が短いほど、夫の家事・育児遂行に対する妻の満足度は高くなる

### 3. 使用するデータと変数

本稿で使用するデータは、全国家族調査 (NFRJ08) のデータである。その中から、就業している既婚女性 (育児休業中のケースは除く) で第一子が18歳未満であるケース469ケースを選択した。育児休業中の妻を除いたのは、実生活において平日の日中家庭にいることになり、家事・育児の主体が育児休業中の妻になる可能性が高いと判断したためである。また、第一子の年齢に関しては、子どもが小さいほど、家事・育児の絶対量も多いことが予想され、年齢比較を前提として扶養年齢に相当する18歳以下とした。

分析で用いる変数は以下の通りである。

#### ① 従属変数

##### a. 夫の家事遂行および育児遂行に対する妻の満足度

「あなたの結婚生活では次にあげる点について、あなたはどれくらい満足していますか。」という質問のもとに「子育てに対する配偶者の取り組み方について」と「家事に対する配偶者の取り組み方について」というそれぞれの項目について「1. かなり満足」から「4. かなり不満足」までの4件法で回答されたものである。数値が高くなるほど妻の満足度が高いことを示すようにして使用した。

#### ② 独立変数

##### a. 夫の家事遂行の程度および育児遂行の程度

「あなたご自身と配偶者の方は、次にあげる (ア) ~ (キ) の家事をどのくらいの頻度で行っていますか。」という質問のもとに、「(ア) 食事の用意」「(イ) 食事の後片付け」「(ウ) 食料品や日用品の買い物」「(エ) 洗濯」「(オ) 掃除 (部屋、風呂、トイレなど)」「(カ) 子どもと遊ぶこと」「(キ) 子どもの身の回りの世話」について、「1. ほぼ毎日」「2. 1週間に4~4回」「3. 1週間に2~3回」「4. 週に1回くらい」「5. ほとんど行わない」の5件法で回答されたものである。数値が高くなるほど夫の遂行度が高くなるように設定した。

さらに、家事項目として (ア) から (オ) の5項目を合算して夫の家事遂行度の指標とし ( $\alpha=.758$ )、育児項目として (カ) と (キ) の2項目を合算して夫の育児遂行度の指標とした ( $\alpha=.755$ )。そして、夫の家事遂行満足度に対しては、夫の家事遂行度を、夫の育児遂行満足度に対しては、夫の家事遂行度を独立変数として使用した。

#### b. 夫の情緒サポート

「次にあげる (ア) ~ (ウ) のそれぞれの項目について、あなたは、あなた方ご夫婦にどの程度あてはまると思いますか。」という質問のもと、「(ア) 配偶者は、わたしの心配ごとや悩みごとを聞いてくれる」「(イ) 配偶者は、わたしの能力や努力を高く評価してくれる」「(ウ) 配偶者は、わたしに助言やアドバイスをしてくれる」というそれぞれの項目について、「1. あてはまる」「2. どちらかといえばあてはまる」「3. どちらかといえばあてはまらない」「4. あてはまらない」の4件法で回答されたものである。数値が高くなるほど、夫の情緒サポートの程度が高くなるように設定した。

さらに、夫の情緒サポート項目として (ア) から (ウ) の3項目を合算して夫の情緒サポートの指標とした ( $\alpha=.867$ )。

#### c. 親の家事・育児サポート<sup>1</sup>

妻の父親、母親、夫の父親、母親に対して、それぞれ「この1年間にこの方に看病や家事・育児などの手伝いをしてもらうことはありましたか」という質問のもと、「1. あった」「2. なかった」という2件法で回答されたものである。「2. なかった」を「0. なかった」と置き換えた上で、妻の父親と母親を合算して「妻の親の家事・育児サポート」とし、夫の父親と母親を合算して「夫の親の家事・育児サポート」とした。

#### d. 夫と妻の通勤時間

「現在、通勤時間は平均すると片道どのくらいですか」という質問のもと、何時間何分で回答されたものを分単位に換算しなおして使用した。

#### ③ コントロール変数

コントロール変数には、先行研究において妻の夫婦関係満足度、および夫の家事・育児に対する満足度に影響を及ぼすと指摘されている変数と夫婦の資源要因となりうる変数を設定した。

##### a. 夫と妻の学歴

妻は高卒者が多数を占め、夫は高卒が過半数を占めているが、大卒も多くみられることから、「大卒以下」を0、「大卒以上」を1とするダミー変数を用いた。

##### b. 夫と妻の収入

夫と妻のそれぞれの収入を「1. なかった」から「15. 1200万円以上」の16カテゴリーを設定して回答してもらっているものに対して、「1. なかった」は0とし、それ以降の15カテゴリーにはそれぞれ中央値をあてはめ、夫と妻の年収の指標とした。

---

<sup>1</sup> ここで、親との同別居、近居などの変数ではなく、直接の援助に関する項目を採用したのは、専業主婦家庭では、同居や近居の親でないとサポート資源として活用されないが (立山 2008)、共働き家庭においては、特に子育てに関して、遠方の親であってもサポート資源として活用されるケースが多いという知見 (松信 2010) によったためである。

#### c.夫と妻の職種<sup>2</sup>

「専門・技術」「管理」「事務・営業」をホワイトカラーとし、「販売・サービス」「技能・労務・作業」「農林漁業」をブルーカラーと設定した上で、「ホワイトカラー」を1、「ブルーカラー」を0とするダミー変数を用いた。

#### d.妻の性別役割意識

「次のような意見について、あなたはどのように思いますか。あなたのお気持ちに最も近いものをそれぞれ1つずつ選んでください」という質問のもと、「(ア) 男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」「(イ) 子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事をもたずに育児に専念すべきだ」「(ウ) 家族を（経済的に）養うのは男性の役割だ」というそれぞれの項目について「1. そう思う」から「4. そう思わない」まで4件法で回答されたものである。数値が高くなるほど、非伝統的な役割意識を示している。これら3項目を合算して、妻の性別役割分業意識の指標とした ( $\alpha=.774$ )。

#### e.第一子年齢

0歳から18歳までの年齢をそのまま使用した。

## 4. 分析結果

### 4.1 変数の概要

詳細な分析に入る前に、各変数の概要をまとめておく。

まず、夫婦の属性から検討する。年齢であるが、妻の年齢は28歳から56歳に分布しており、平均は39.09歳である。夫の年齢は27歳から60歳に分布しており、平均は41.48歳である。学歴は、妻に関しては高卒以下が圧倒的多数を占め、86.5%、大卒以上は13.5%である。また、夫の学歴は、高卒以下が過半数を占め、61.7%であるが、大卒以上の割合は38.3%と妻よりも多い。職種に関しては、妻の場合、専門・技術職は少ないものの、事務・営業などのホワイトカラーが半数よりやや多く53.5%、販売・サービスや技能・労務・作業を含むブルーカラーが46.5%である。また、夫の職種は、専門・技術・管理を含むホワイトカラーが46.8%、販売・サービスを含むブルーカラーが46.8%であった。収入（中央値）については、妻の平均が187.26万円、夫の平均が508.74万円と、妻の収入は夫の約三分の一である。ただ、標準偏差が非常に大きく（妻は194.141、夫は233.644）、ばらつきが大きいことがわかる。

続いて、妻の性別役割意識であるが、平均値が7.74であるが、最大値が12であることから、やや非伝統的な意識が強いことがわかる。また、夫の家事・育児遂行度については、家事の平均値が11.01、育児の平均値が4.92である。家事の最大値は21、子育ての最大値は

---

<sup>2</sup> 就業形態に関しては、コントロール変数として投入したところ、多重共線性が発生してしまったため、職種の方をコントロール変数として選択した。

10 であることから、家事、育児とも中程度の遂行度であるといえよう。夫の情緒サポートは、最大値が 12 であるのに対して、平均値が 8.56 とかなり高い。妻の親、夫の親からの家事・育児サポートに関しては、それぞれの最大値が 2 であるが、妻の親のサポートが 1.11、夫の親が 0.81 と妻の親のサポートが多いことがわかる。通勤時間は、妻の平均が 19.65 分、夫が 33.88 分である。妻の最大値は 110 分、夫の最大値は 120 分であるが、妻は 10 分 (20.3%)、15 分 (16.0%)、夫は、30 分 (15.9%)、20 分 (12.7%)、60 分 (12.4%) の順に多く、妻の通勤時間が圧倒的に短いことがわかる。夫の家事・育児遂行に対する妻の満足度は、それぞれ最大値が 4 であるが、平均値が、家事に関しては 2.47、育児は 2.71 と比較的高いことがわかる。

第一子の年齢は、平均が 11.28 歳である。

#### 4.2 分析および仮説の検証

表 1 は夫の家事遂行に対する妻の満足度について、表 2 は夫の育児遂行に対する妻の満足度について重回帰分析を行ったものである。階層的重回帰分析により、前述の従属変数を順に投入し、最も決定係数が高く、説明度の高いモデルを採用した。その結果、夫の家事遂行に対する満足度、夫の育児遂行に対する満足度のいずれについても、「妻の年齢」、「夫の年齢」、「妻の職種」、「夫の職種」、「妻の学歴」、「夫の学歴」、「妻の収入」、「夫の収入」、「妻の性別役割意識」、「夫の情緒サポート」、「夫の家事遂行／育児遂行度」、「第一子年齢」、「夫の親の家事・育児サポート」、「妻の通勤時間」を従属変数としたモデルが採択された。

夫の家事遂行に対する妻の満足度については、1%有意で「夫の情緒サポート」と「夫の家事遂行度」の正の影響が確認された。「夫の情緒サポート」は、前述の末盛や李の「夫婦関係満足度」において影響が確認された変数であるが、本研究での分析により、家事遂行の程度についても影響が確認されたわけである。さらに、「夫婦関係満足度」に関しては影響が確認されていなかったが、岩間による家事の不公平感に関する研究では、影響が確認されていた「夫の家事遂行度」についても影響が確認された。

また、夫の育児遂行に対する妻の満足度については、1%有意で「夫の情緒サポート」と「夫の育児遂行度」の正の影響が確認され、さらに 5%有意で「夫の親の家事・育児サポート」と「妻の通勤時間」の負の影響が確認された。つまり、夫の育児遂行に対する妻の満足度に影響を与える要因は、家事の場合と同様の「夫の情緒サポート」と「夫の育児遂行度」にとどまらないということである。では、影響が確認された「夫の親の家事・育児サポート」と「妻の通勤距離」について検討してみることにする。

表1 夫の家事遂行に対する妻の満足度に対する重回帰分析

独立変数	標準化係数
妻の年齢	-.024
夫の年齢	.006
妻の職種 (ホワイトカラーダミー)	.070
夫の職種 (ホワイトカラーダミー)	.012
妻の学歴 (大学・大学院卒ダミー)	-.003
夫の学歴 (大学・大学院卒ダミー)	.005
妻の収入 (中央値)	.029
夫の収入 (中央値)	-.044
妻の性別役割分業意識	-.056
夫の情緒サポート	.392**
第一子年齢	-.066
夫の家事遂行	.470**
夫の親の家事・育児サポート	.018
妻の通勤時間	.061
R <sup>2</sup>	.428
F比	11.499**



表2 夫の育児遂行に対する妻の満足度に対する重回帰分析

独立変数	標準化係数
妻の年齢	.059
夫の年齢	.038
妻の職種 (ホワイトカラーダミー)	-.008
夫の職種 (ホワイトカラーダミー)	.046
妻の学歴 (大学・大学院卒ダミー)	.082
夫の学歴 (大学・大学院卒ダミー)	-.020
妻の収入 (中央値)	-.007
夫の収入 (中央値)	.009
妻の性別役割分業意識	.034
夫の情緒サポート	.428**
第一子年齢	-.007
夫の育児遂行	.481**
夫の親の家事・育児サポート	-.128*
妻の通勤時間	-.117*
R <sup>2</sup>	.513
F比	15.830**

まず、「夫の親の家事・育児サポート」が夫の家事に対する妻の満足度には影響を及ぼしていないのに対し、子育てに関する妻の満足度に対して負の影響をもたらしているのはなぜか。また、「妻の親の家事・育児サポート」の影響が確認されなかったのはなぜだろうか。妻の親の家事・育児サポートと夫の親の家事・育児サポートと居住距離との関係について、クロス集計をしたところ（表3、表4、表5、表6）、妻の親、夫の親とも居住距離が離れるほどサポート数は減るものの、妻の親は夫の親に比べてサポートを受けている割合が高く、さらに比較的居住地が遠い場合でも利用されている傾向がみられた。つまり、夫の親のサポートを多く受ける場合は、夫の親と同居もしくは近居である可能性が高く、逆にサポートが少ない場合は、別居もしくは遠方に居住している可能性が高くなるといえる。筆者が保育園に子どもを預ける母親を対象に行ったインタビュー調査では、やはり夫の親と同居・近居している場合にサポートを受けるケースが多く、その場合は、家事のサポートではなく、もっぱら子育てに関してのサポートであった。しかし、子育てに関して夫の親のサポートを受ける場合は、同居や近居であることから、日常的にサポートを受けることになり、しつけ方針などにも夫の親の意見が反映されてくるようになる。しかし、しつけの方針に違いがあっても妻は何も言えず、かえってストレスになる、さらに、夫が子育て

を夫の親任せにしてあまりかかわってくれないなどという話も聞かれた。それに対して、妻の親に子育てのサポートを受ける場合には、遠方に住んでいる親に子どもの病気時にサポートを受けるというケースもあり、また日常的にサポートを受けても自分の親なので気兼ねなくしつけの方針についての注文ができるといったことから、必ずしもこのような悩みは聞かれなかった（松信 2010）。つまり、夫の親の子育てに関するサポートは妻のストレスや夫に対しての不満を生み出してしまうこともあり、夫の親のサポートが少ないほど、夫の育児に対する妻の満足度が高くなるという傾向がみられるのではないだろうか。

また、妻の通勤時間が短いほど夫の育児遂行に対する妻の満足度が高くなるという傾向に関しては、既に仮説の設定でも指摘したように、通勤時間の短い妻ほど、自らが家事・育児を遂行することを前提としているためであることが考えられる。しかし、育児では影響が確認されたが、家事では確認されなかったのはなぜだろうか。家事に比べて育児は時間的制約がつきものである。子どもが小さいうちは、保育園等のお迎えがあり、また学齢期でも学校にかかわることが平日の日中に生じたりする。そうしたときに、通勤時間が短いということは、仕事と両立するにあたり、負担やストレスが少ないことを意味する。こうした理由から、特に育児に関しては妻の通勤時間の影響がみられたのではないだろうか。

以上の分析結果から、仮説の 1, 2 は検証され、3, 4 は夫の育児遂行でのみ検証された。

表 3 妻の父親の居住地×妻の親の家事・育児援助

		妻の親の家事・育児サポート数			合計
		0	1	2	
父親居住地	同居	3 6.5%	6 13.0%	37 80.4%	46 100.0%
	15分～30分	37 27.2%	25 18.4%	74 54.4%	136 100.0%
	30分～60分	19 39.6%	10 20.8%	19 39.6%	48 100.0%
	1時間～3時間	28 59.6%	7 14.9%	12 25.5%	47 100.0%
	3時間以上	29 65.9%	5 11.4%	10 22.7%	44 100.0%
合計		116 36.1%	53 16.5%	152 47.4%	321 100.0%

$\chi^2$ 検定  $p < .00$

表4 妻の母親の居住地×妻の親の家事・育児援助

		妻の親の家事・育児サポート数			合計
		0	1	2	
母親居住地	同居	3 6.0%	10 20.0%	37 74.0%	50 100.0%
	15分～30分	36 26.9%	23 17.2%	75 56.0%	134 100.0%
	30分～60分	19 38.8%	10 20.4%	20 40.8%	49 100.0%
	1時間～3時間	29 58.0%	8 16.0%	13 26.0%	50 100.0%
	3時間以上	28 73.7%	3 7.9%	7 18.4%	38 100.0%
合計		115 35.8%	54 16.8%	152 47.4%	321 100.0%

$\chi^2$ 検定 p < . 00

表5 夫の父親の居住地×夫の親の家事・育児援助

		夫の親の家事・育児サポート数			合計
		0	1	2	
夫の父居住地	同居	11 15.7%	19 27.1%	40 57.1%	70 100.0%
	15分～30分	43 53.8%	10 12.5%	27 33.8%	80 100.0%
	30分～60分	19 57.6%	6 18.2%	8 24.2%	33 100.0%
	1時間～3時間	32 71.1%	6 13.3%	7 15.6%	45 100.0%
	3時間以上	28 82.4%	3 8.8%	3 8.8%	34 100.0%
合計		133 50.8%	44 16.8%	85 32.4%	262 100.0%

$\chi^2$ 検定 p < . 00

表6 夫の母親の居住地×夫の親の家事・育児援助

		夫の親の家事・育児サポート数			合計
		0	1	2	
夫の母居住地	同居	12 16.0%	22 29.3%	41 54.7%	75 100.0%
	15分～30分	43 53.1%	11 13.6%	27 33.3%	81 100.0%
	30分～60分	18 56.3%	6 18.8%	8 25.0%	32 100.0%
	1時間～3時間	31 75.6%	4 9.8%	6 14.6%	41 100.0%
	3時間以上	29 87.9%	1 3.0%	3 9.1%	33 100.0%
合計		133 50.8%	44 16.8%	85 32.4%	262 100.0%

$\chi^2$ 検定  $p < .00$

## 5. まとめと今後の課題

本研究の分析により、夫の家事・育児遂行に対する妻の満足度に関しては、夫の実質的な遂行度のみならず、情緒性が影響されていることが確認された。前述の岩間の研究では、家事分担の不公平感について、勢力論は立証されなかったとされているが、ブランバーグとコールマンによれば、夫婦間における情緒性（コミットメントの程度や魅力など）は、特に妻の社会経済的資源を減じてしまう効果をもつ。その結果、妻の勢力に影響を及ぼし、結果として夫婦間の家事・育児分担の平等性に影響をもたらすとしている（Blumberg and Coleman 1989）。すなわち、夫の情緒的サポートは、妻の勢力を弱め、結果として夫が実質的な家事・育児にかかわらなくとも、その状況に対して妻が満足するという構図を導き出している可能性も考えられる。

今回のデータにおいては、夫婦の勢力を考察するための項目がなかったため、この点は考察することができなかったが、今後は夫の情緒的サポートと妻の勢力の関係について考察することを課題としたい。

## [文献]

- 岩間暁子, 1997, 「性別役割分業と女性の家事分担不公平感」『家族社会学研究』9: 67-76.
- Blumberg, Rae Lesser and Marion Tolbert Coleman, 1989, "A Theoretical Look at the Gender Balance of Power in American Couple.", *Journal of Family Issues*, vol.10, no.2, June: 225-250.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2008, 「第4回全国家庭動向調査」.
- 末盛慶, 1999, 「夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感」『家族社会学研究』11: 71-82.
- 牧野カツコ, 1982, 「乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>」『家庭教育研究紀要』3: 34-56.
- , 1983, 「働く母親と育児不安」『家庭教育研究紀要』4: 67-76.
- , 1989, 「<育児不安>とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究紀要』10: 23-31.
- 松信ひろみ, 2002a, 「郊外家族と近代家族—妻の就業と職住近接」『都市問題』93(5): 73-83.
- , 2002b, 「夫婦の勢力関係再考—勢力過程への着目とフェミニスト的視点の導入」『新潟ジェンダー研究』4: 31-46.
- , 2010, 「共働き家庭における母親の仕事と子育ての両立戦略」『駒澤社会学研究』42: 59-80.
- , 2011, 「『仕事と家庭生活の両立に関する調査』報告書」(平成22年度駒澤大学特別研究助成金研究成果報告書).
- 李基平, 2008, 「夫の家事参加と妻の夫婦関係満足度—妻の夫への家事参加期待とその充足度に注目して」『家族社会学研究』20(1): 70-80.

## **The Factor in Dual-earner Wives' Satisfaction of Husbands' Household work and Childrearing**

**Hiromi MATSUNOBU**

**Komazawa University**

This study examines at factors in working wives' satisfaction of husbands' household work and childrearing . Analysis showed that the degree of husbands' household work and childrearing and husbands' emotional support for wives are effects on the wives' satisfaction of husbands' household work and childrearing . And it is confirmed that husbands' parents support for housework and childrearing and wives' time spent in commuting are effects on wives' satisfaction of husbands' household work and childrearing .

It has been proved that husbands' emotional support for wives effect on wives' marital satisfaction and that the degree of husbands' household work effect on wives' satisfaction of husbands' household work in preceded studies. In this study both husbands' emotional support for wives and the degree of husbands' household work and childrearing are effects on the wives' satisfaction of husbands' household work and childrearing . In Addition, it was proved that husbands' parents support for housework and childrearing and wives' time spent in commuting are effects on wives' satisfaction of husbands' household work and childrearing .

**Key words and phrases:** dual-earner couples, wives' satisfaction of husbands' household work and childrearing, husbands' emotional support for wives, husbands' parents support for housework and childrearing, wives' time spent in commuting